

I 令和2年度の運営総括及び来期の課題

今年度は新型コロナウイルスという未曾有の災害に見舞われ、初めてのことばかりの対応に追われた1年間だった。開館後初の臨時休館を行い、長期間子ども達の姿を見ることができない時期を過ごした。シーンとした児童館、子どもいない外の風景を目の当たりにし、館内に子ども達の声が響き渡ることの幸せさ、地域における子ども達の存在の大切さを改めて実感することができた。児童館を運営する身として貴重な体験であり、自分達は“子どもが大好きなんだ”という原点に立ち返ることができた休館期間だった。開館後、消毒や換気、イベントや人数の制限など、対応がとても難しかったが、その分職員間でたくさん話し合い連携を密にすることができたし、本当に必要なイベントや実施のやり方などを精査することができた。コロナ禍のこの状況だからこそ考えられたこと、できたこともあった。

今後何年コロナウイルスと共存していかねばならないのかはわからないが、“コロナだからやらない、できない”ばかりではなく、“じゃあどう変えたらできるか？”という風を考え、逆境に負けない、地域にとってなくてはならない子ども達の居場所であり続けたいと思う。また、加えて感染症対策をしっかりとし、利用者が安心安全に利用できる児童館運営をしていきたい。

1. 乳幼児事業

(1) 総括

緊急事態宣言後の開館間もなくは、警戒もあり乳幼児親子の姿も少なかったが、徐々に増えていった印象。コロナ禍で様々な機関で出入りや子育てイベントなどが規制され、縮小・中止が進む中、子育てを不安に感じたり、誰に何を聞いたらいいのか迷う保護者達が例年に比べ多かったようだ。そういった保護者達が、情報や繋がりを求め児童館を利用していたので、コロナ禍でも利用が多かったと言える。児童館を通じて誰かと話したり笑い合ったり、悩みを共有することで保護者の心が軽くなり、また子ども達も家でお母さんだけでなくのコミュニケーションだけではなく、同年代の子ども達と関わり合うことでより豊かな発達に繋がっていく。まさに支援センターや児童館だからこそできることで、地域の子育て支援に貢献できたと感じている。

①ちびっこ広場

毎週水曜日の午前中に『ちびっこ広場』を行っている。内容は絵本読み聞かせ、手遊び、親子体操、工作、誕生会等となっている。『ちびっこ広場』への参加を目的に来館する親子が多く、親子で一緒に手遊びやふれあい遊びをしたりする楽しさを共有している。

昨年まで頻繁に遊びに来ていた幼児の半数が保育園や幼稚園に入園したこともあるが、コロナ禍ということもあり、前半期は参加者が少なかったが、後半期になるとおなじみの

顔ぶれが安定的に参加してくれるようになっていった。

祖父母が孫を連れて来館することも多く、祖母同士、祖母と母親などの異世代の交流も度々見られる。こうして“地域一体となって子育てをする”という環境ができ上がってきている。今後も利用者のニーズをしっかりと捉え、より楽しい、居心地の良い児童館を目指して管理運営を行っていきたい。

②つくって遊ぼう

毎月第2週目の水曜日、木曜日、金曜日に親子で一緒に工作を楽しむ行事として『つくって遊ぼう』を行った。季節に合わせた工作や、月齢の低いお子さんでも遊べる手作りおもちゃなど、親子で楽しんで工作できるように工夫してきた。この行事をきっかけに、工作が好きになっていく子どももいるようで、『ちびっこ広場』に参加していた幼児が成長し、児童館の工作コーナーで廃材を使い楽しそうに工作をしている姿もよく見られる。

③しゃべろっと

南区健康福祉課主催の子育て支援研修会に参加し子育て支援リーダーとなった『子育てオーエンジャー☆みなみ』が中心となり、乳幼児の母親対象に様々なイベントを企画し、支援を行っている。味方児童館を活動場所とし、育児中のちょっとしたストレスや愚痴を気軽に話したり育児の悩みを相談し合うのが目的だ。これまでは話しやすい環境づくりをするためにハンドトリートメントやお茶、お菓子も用意し、予約なしで気軽に遊びに来られるような内容だったが、2020年度は飲食やハンドトリートメントは中止、コロナ禍でも利用者が安心・安全に参加できるものに内容を変えて行った。予定では年間6回の企画だったが、5月は休館のため中止とし、7月からの活動だった。

11月のしゃべろっとでは『ちいさな秋のコンサート』とし、講師の方々をお招きしピアノとフルートの演奏会を行った。選曲には、子ども達も耳馴染みのある歌、母親世代にとっても懐かしい歌などを盛り込んでもらった。親子で一緒に楽しむことができるこのコンサートは、アンケートの結果もとても好評だった。

3月には7組の親子を定員とし、『親子で楽しむ♡プチヨガ』を開催。コロナウィルスの予防もあり、身体を動かすイベントはしてこなかったが、定員を減らし密を避け、換気を徹底した環境で行った。また、親子でふれあいができるようなプログラムを組んでもらい、お母さんに抱っこされたりした子ども達もとても嬉しそうだった。

まだまだ味方児童館の存在自体を知らない方や、知っていてもなかなか一歩踏み出すことができない母親も多い。地域の方と協力しながら、そうした母親達を孤立させないためのケアを今後も続けていきたい。

(2) 来期の課題

令和元年度後半から世界的に大流行している新型コロナウイルスの影響により、子ども達、親子が安心して過ごせる遊び場が減った。行き場や情報を求める保護者の多さをこの

1年間で実感した。また休館になったことを受け、スタッフ一同が子ども達の声が響く児童館の大切さや役割、また、子ども達が普通に安心して遊べる環境を守らなくてはならないと改めて痛感した。来年度も引き続き館内の設備・玩具の消毒、換気の徹底や3密を避けること、来館者の体調を気に掛けることなど、スタッフ一人一人が意識を持って環境整備に力を入れる。

2. 小学生事業

(1) 総括

今年度はコロナウィルスの影響で非常に小学生の来館が減ったのが印象的だった。乳幼児・小学生・中高生の中で一番減ったのは小学生だったと言える。理由として大きいのは、運動遊びの制限だと考える。呼気があがるような激しい運動を、前半期は基本全面中止としたことは、子ども達の“児童館離れ”に大きく関わったように感じる。また、3. 4. 5月の臨時休館も、来館のはずみがついていた小学生達にストップをかけることとなり、“家で少数の友達とゲーム”という習慣に拍車をかけたようだった。

しかし、味方児童館の特長ともいえる異年齢・異学校の子どもの交流は今年度も目立った。今年は、小学生数人が、児童館でおしゃべりをしたり一緒に遊んでくれていた高校3年生女子を“送る会”を自主的に企画。夏から準備を進め、3月に会を実現させた。きちんと司会原稿も作り、ゲームなどのレクリエーションや別れの言葉なども盛り込んでいた。子どもながらに一生懸命考え、準備企画に奮闘する姿、お世話になったお姉さんに感謝の気持ちを形にして伝えようとする姿を横で見ている、自主性や積極性、人を思いやる心などが確実に育まれているのを実感し、感動した。今後も子ども達の自由な発想や気持ちを大切に、寄り添いながら、子ども達と一緒に楽しい児童館をつくりあげていきたい。

①なかよし広場

毎週火曜日に、その日に遊びに来ていた小学生が、30分間職員の企画したレクリエーションをして遊ぶというイベントだ。職員が企画したレクリエーションを行うので、子ども達が自分では思いつかないような遊びができ、遊びが広がるというメリットもある。内容の中には、子ども達の防災に関する知識と意識を高めるために『ミニ避難訓練』というものも定期的に組み込んだりもする。『なかよし広場』は、異学年の子ども達同士で交流できるので、ここが児童館の良い部分だと実感させられる。

②つくって遊ぼう・おりがみキッズ

『つくって遊ぼう』は、定期的に子ども達に様々な工作を楽しんでもらうイベントで、コロナ禍でも実施できた小学生事業の一つだ。『おりがみキッズ』は、今年度は春夏秋冬の風物詩を折り紙で折り、それを貼り付けてカレンダーを作る、という内容で行ってみた。またコロナ禍で来館が少ない中でも、たくさん子ども達に体験してもらえよう、期間も例年より長く4日間を設け、あえて土日の間も期間としてみた。結果、多くの子ども達

がカレンダー作りに参加し、喜んで持ち帰っていく姿が見られた。ここでもコロナ禍ならではの工夫が活きたと思っている。

③移動児童館

今年の『移動児童館』も例年通り『味方ひまわりクラブ』で二度行った。内容もコロナ禍でできる内容を考え、一度目は大型絵本の読み聞かせと、児童館で行うイベント『ぬりえコンテスト』へのひまわりクラブの子ども達の参加、二度目は大型絵本の読み聞かせと壁面工作材料の提供ということで、雪だるまの吊るし飾りのキットとお正月の絵馬のキットを作成し届けた。ぬりえは、“ぜひ自分の絵に投票しに、児童館に遊びに来てね”という趣旨を含ませ、雪だるまの吊るし飾りは、子ども達に完成させてもらった後児童館に飾り、“いつでも見に来てね”と来館に繋げるようにした。コロナ禍では、かなりできることが制限された移動児童館となったが、とても喜んでもらったので、次年度もできる形での移動児童館を実施していきたいと思う。

④その他の行事

コロナウィルスの影響で多くの行事を中止にしたが、やり方を変えたり、規模を縮小して行った行事もあった。例えば、『ハロウィンパーティー』は、『レッツ!!ハロウィン!!』と名称を変え、例年お向かいのデイサービスセンター味方に子ども達を連れて慰問を行っていたが、今年はリモートで繋がり、子ども達の笑顔とダンスをお年寄りの皆さんに届けることかできた。また、飲食ができず、パーティーができないのでゲームや『ミイラコンテスト』をしてお楽しみ会にして楽しんだ。また、『おまつり』も大きく形を変えた事業だ。小学生対象とし、2部制、定員を1回30名とし、完全入れ替え、予約制で行ってみた。初めての試みだったが、密を避けた状態で子ども達におまつりを楽しんでもらうことができた。こんな状況下でも、少しでも子ども達に楽しみを提供したいといろいろな工夫した結果、様々な発見ができた1年だった。

(2) 来期の課題

コロナ禍においても子ども達が安全に遊べるような企画を考え、挑戦していくことを課題とする。今後ずっと続いていくかもしれないなかで、それでも子ども達の声に耳を傾け、“やれない”ではなく、どのやり方でならできるだろう？を模索していくことを諦めず、子ども達に“楽しい！”を提供し続けていきたい。

3. 中・高生事業

(1) 総括

近年中学校との連携が増えてきていたが、こちらも様々な共通事業を中止とせざるをえなかった。学校という機関とは連携はできなかったが、中高生は変わらず遊びに来ていた。

日々の生活の話や学校、バイト、家族、友達関係の話などをスタッフに話し帰っていく姿が頻繁に見られた。中高生が度々来館し、小学生の遊び相手や話し相手をしてくれることで、小学生達も憧れを抱いたり、さらに自分達よりも下の年齢の子ども達に優しく接してあげたり面倒を見てあげたりすることができてきているように感じる。児童館を利用した子ども達が成長し、自分達がしてもらったように今度は下の世代に返していく、こうした循環が双方に良い刺激と成長を与えていると思う。この流れを大切に、幅広い世代同士が交流できるよう手助けしながら見守っていきたい。

①クリスマス会

今年もクリスマス会で味方中学校吹奏楽部の生徒達がクリスマス演奏会を行ってくれた。鑑賞する対象を小学生30名と限定とし実現できた。発表の場がなかなかなかった中学生達にとっても地元の子供達に還元できる良い機会となったようだった。

②ふゆまつり

例年、夏冬2回のおまつりの際に中学校にも生徒ボランティアを募っているが、今年は感染拡大を予防するため、ボランティアは一切呼ばずに行おうと計画をしていた。しかしまつりを知った中学生女子が「手伝いに来ようか？」と提案してくれたことで、結果的に6人の中学生男女が有志でブースのボランティアとして活躍してくれた。中学生がいてくれたことでおまつりも盛り上がり、小学生達も交流ができ楽しそうだった。参加する側だけでなく、運営側にまわる面白みや大変さも知ることは中学生にとって良い経験となったと思う。また、こうして役割をつくるということも、中高生の居場所をつくることに繋がっていると感じている。

(2) 来期の課題

中高生においても、やはりコロナの中でも実現可能な、中高生がもっと児童館で活躍できたり、主役になれるような事業を考えていきたい。そのために、今年度はお休みしていた中学校高校との連携を、次年度は積極的にとれるよう各機関と相談していこうと思っている。

4. 地域との連携事業

①味方地区公民館との連携事業

- ・人形劇（7月）…中止
- ・食育講座おはよう朝ごはん（7月）…中止
- ・陶芸教室（7、8月）…中止
- ・育児講座ベビーマッサージ（11月）…実施
- ・新大アカペラサークルコンサート（11月）…中止

②味方小学校、おむすびクラブとの連携事業

- ・いきいき子ども塾「小学校に泊まろう」…中止
- ・「自学おうえん隊」…中止
- ・文化祭体験教室「カプラ」…中止

③味方中学校との連携事業

- ・職場体験（7月）…中止
- ・クリスマス会吹奏楽部演奏会（12月）…実施
- ・おまつり生徒ボランティア（8、2月）…中止

④ボランティアとの連携事業

- ・ちびっこクリスマス会
- ・ふゆまつり
- ・ちびっこ広場での絵本の読み聞かせ
- ・瓢箪栽培ボランティア